

文部省選定
優秀映画鑑賞会推薦

優秀映像教材選奨最優秀作品賞
日本映画ペンクラブ推薦

伝統工芸の名匠

しょうかんさい

竹工芸 飯塚小玕斎



作 品 名：シリーズ〈伝統工芸の名匠〉
「竹工芸・飯塚小玕斎」
(35mm・カラー・30分)

企 画 製 作：財団法人ポーラ伝統文化振興財団

製 作 協 力：株式会社 每日映画社

製作スタッフ：製作・土屋武彦

脚本・監督・石井敏朗

撮 影・上原新次

照 明・相田隆久 錄 音・井形 正

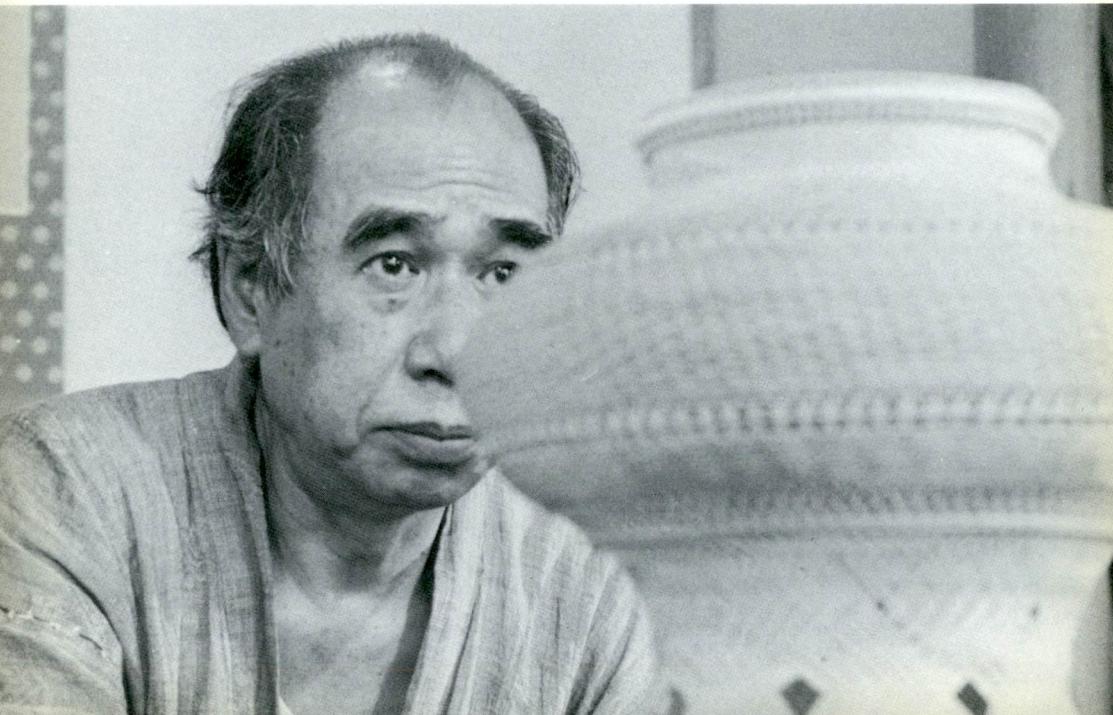
音 楽・原 正美 編 集・上中哲夫

ナレーター・和田 篤

協 力：文化庁文化財保護部

東京国立近代美術館

栃木県立美術館



初め飯塚小玕斎は画家を志ぎし、東京美術学校で油絵を学んだ。しかし、戦時中に兄が病死し、次いで父が病いに倒れたために、家業の竹工芸の道を歩む決心をする。

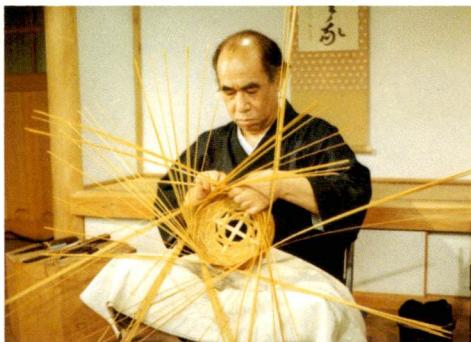
父・琅玕斎は『竹の名人』とうたわれた人。父の厳しい指導で、竹の編組や丸竹物、茶杓作り、丸竹組物など広範囲な伝統的技法を習得竹工芸家としての資質に磨きをかけた。

「工芸ほど知恵が必要な芸術はない。人を感動させるためには、作者自身がより鋭敏な美意識と感動をもって制作しなければいけない。素材として複雑で深い要素を持っている竹工芸はなおさら。竹が自分と一体にならなければ……」細く薄く加工した竹は、強く曲げすぎると折れる。そのギリギリの限界に挑戦し、ためこむことによって美をひき出す。作者におごりがあれば、竹は正直に非情のムチを打つ。無理に曲げようすると竹が痛がると言う。「父が念佛を唱えながら曲げ編んでいた心境が、今ようやく解かってきました。竹を知り、その特性の先を読む創造。そこに最高の喜びがあるのです」

映画の中では、琅玕斎考案の束編みを現代的な感覚で巧みに応用し伝統的な技法や自から工夫した新しい編組技法を駆使して用の表現を追求する。

飯塚小玕斎・年譜

- 大正8年 5月6日東京に生れる。本名・成年。
昭和17年 東京美術学校（現東京芸大）油絵科卒業。徴兵。
昭和21年 復員後、竹工を父琅玕斎に師事。
昭和22年 第3回日展に初入選。
昭和28年 第9回日展で北斗賞。
昭和29年 第10回日展で特選。
昭和35年 第3回日展で菊華賞。
昭和49年 第21回日本伝統工芸展で文部大臣賞。
昭和50年 第22回日本伝統工芸展で朝日新聞社賞。
昭和54年 正倉院御物の竹芸品の調査に従事する。（～58年）
昭和57年 重要無形文化財『竹工芸』保持者に認定される。
昭和59年 紫綬褒章を受章。



竹工芸について

素朴な姿や形の美しさと、加工が容易で、強靭で弾力性に富む材質を利用して、竹工芸は古くから人間の生活の中に取り入れられてきた。

技法は、丸竹物と編組物とに大別され、特に編組物は四つ目、網代など共組物と、蘆目、縄目などの回し物に分かれて、さらに多種多様な変化がある。

大陸から伝えられた竹工芸は、はじめは編組技術に重きが置かれ、職人芸に負うところが多かったが、大正末期ごろからの工芸美術運動の影響を受けた飯塚琅玕斎は、伝統的な編組技術に基く自由な発想による個性豊かな作風を発表し、竹工芸分野に新風を吹き込んだ。その後、多くの竹工芸家の創作活動によって芸術的なレベルに高められ、今日の美術工芸品としての展開をみせている。

Pola Foundation for the Promotion of Traditional Japanese Culture

公益財団法人 ポーラ伝統文化振興財団

<http://www.polaculture.or.jp>

〒141-0031 東京都品川区西五反田 2-2-10 ポーラ第2五反田ビル

TEL.03-3494-7653 FAX.03-3494-7597

©3,000